学会財政の現状と来年度の見通し

日本気象学会理事長　礒　野　謙　治

諸物価の高騰がはげしいため，学会は健全財政を維持することが極めて困難な状況にあります．このため，学会は他の多くの学協会にならい，会員みなさんの賛同を得て，本年度から学会費の前納制を採用し，財政の健全化をはかることになりました．すでに年度の半ばも過ぎておりますので，ここに学会財政の現状を報告し，あわせて来年度財政の見通しについてお知らせします．

昭和48年度

年度半ばで異常なまでに物価は高騰しつつあり，その上に紙不足が深刻化している現状で，年度末までの予測をたてることは困難です．しかし，多くの会員が会費前納に協力して下さったこと，また気象研究ノートによる収入増などにより，昭和48年度はほぼ予算書（天気，第20巻，第7号参照）通りで乗り切れる見込みです．なお赤字が出た場合は昭和49年度の前納金で補うことになります．

昭和49年度

本年度と同規模の学会活動を維持していくとし，また学会費を据え置き，印刷費（25%up は確定的），郵送料および人件費が値上がりした場合，昭和49年度の予算見込みは表1に示す通り，約460～500万円の赤字となります．このような多額の赤字が出る原因は諸物価の高騰にありますので，来年度の学会費値上げはさけられない状況にあると判断されます．しかし，来年度会費が値上げしたとしても，実施時期は昭和50年1月（会費前納制を採用しているため）からですので，赤字財政解消は50年度にもちこされます．

現在の学会費は昭和47年4月以降に適用されているもので，2年9月カ月後の昭和50年1月以降では物価にスライドさせるとすると，40%前後の値上げも止むを得ないと考えられます．増収源として，学会費の値上げのほか，次の4項目によるものを考えています．

1. 気象集誌のページ・チャージ

これまで，刷り上り8頁を超える論文については超過頁の印刷費全額を著者の所属する機関で負担していただくことになっていましたが，これに来年度から4～8頁について印刷費の半額負担を追加する．

表1　昭和49年度予算見込み

収入の部		支出の部		
科目	金額（千円）	科目	金額（千円）	備考
学会費	13,899	印刷編集費	23,394	25%up
雑誌図書領布	11,808	図書購入費	300	
文部省助成金	580	発送通信費	2,630	昭. 49. 10より小包みだけ値上げ
雑収入	2,200			
前年度繰越金	—	会議費	765	
		各賞	250	奨励金を含む
		支部交付金	849	
		事務費 (1)	5,061	うち人件費 3,541
		事務費 (2)	4,720	うち人件費 3,200
		旅費	50	
		退職金	170	
		繰越金	—	
合計	28,487	合計 (1)	33,469	
		合計 (2)	33,128	
差引額		(1) △4,982	(2)△4,641	

集誌の最近3年間の年平均頁数は545頁で，このうち4～8頁の範囲に入るものが151頁，9頁以上のものが156頁となっています．新方式のページ・チャージを採用後は9頁以上のものの頁数が10～20%減るでしょう．来年度の印刷費は頁当り約9,000円で，第4号からこの方式が適用できるとすると，これによる収入は約165万円となります．表1の雑収入220万円にはこれまでの方式のページ・チャージによる収入75万円が見込まれているので，これを差引くと，実質の増収分は90万円となります．

2. 大会参加費

年2回開催の大会への参加費を200円から1,000円に値上げすることにより，約20万円（地方で開催の分についてはそこの大会運営費にあてる）の増収をはかる．しかし，この値上げ案は来年度東京で開催の春季大会には，時間的な余裕がなく，適用できない．

表2　初年度（昭和49年度）の収支

赤字の部		増収の部	
科目	金額（千円）	科目	金額（千円）
諸物価値上りによるもの	5,000	会費 (1) 30%up (2) 50%up	800(年間の1/4) 1,500(年間の1/4)
		集誌ページ・チャージ	900
		大会参加費	0
		賛助会費	500
		別刷り	100
合計	5,000	合計	(1) 2,400 (2) 3,000
差引額		(1) △2,600	(2) △2,000

表3　平年度（昭和50年度）の収支ただし，諸物価の上昇はないとする

赤字の部		増収の部	
科目	金額（千円）	科目	金額（千円）
諸物価の値上りによるもの	5,000	会費 (1) 30%up (2) 50%up	3,600 6,000
		集誌ページ・チャージ	1,095
		大会参加費	200
		賛助会費	500
		別刷り	100
合計	5,000	合計	(1) 5,495 (2) 7,895
差引額		(1) 490	(2) 2,890

3. 賛助会費

学会理事会を中心にして賛助会員の拡張をはかっており，この約1年間で収入は135万円から192万円にふえています．さらに50万円の増収を目標に努力しておりますので，会員みなさんのご協力をお願いしたい．なお，現在加入している賛助会員の名簿は天気毎号の裏表紙にのせてあります．

4. 別刷り

集誌，天気，気象研究ノートの別刷り代の値上げにより，10万円の増収を見込む．

以上の4項目のほか，機関紙と気象研究ノートへの広告掲載による収入が考えられますが，宣伝効果が少ないことから，相手が乗ってこないのです．この点については理事会でさらに検討させていただきます．

以上の増収計画にもとづいた初年度（昭和49年度）および平年度（昭和50年度で，諸物価は昭和49年度と同じとする）の財政の収支を表2および3に示します．表2は初年度の学会費が30%または50%値上げされても，年間の1/4の期間について値上げされるだけなので，200～260万円の赤字になることを示しています．また表3は学会費が30または50%値上げされると，以後の物価上昇がないと仮定して，平年の収支がそれぞれ50万円または290万円の黒字となることを示しています．しかし，今日の物価上昇傾向がいっそうはげしくなるならば，会費の再値上げ，あるいは事業縮少がさけられません．

昭和49年度以後の財政は上述のように極めて重大な問題となっているので，理事会では昭和50年1月から会費を値上げしてもなお前納金の先喰いでやっていくよりないと判断しています．したがって，会員のみなさんが学会費の前納に協力していただかねばなりません．また，理事会の考え方などについて建設的なご意見をお寄せ下さるようお願いいたします．

（以下55ページの続き）

予算以上にやりすぎているのではないか，本部で「天気」や「気象研究ノート」などが発行されている時に月例会ノートは二重投資ではないかなどの批判が高まって来て理事の苦労も大変であった．1970年に京大の山元教授が支部長となってからはこの沈滞した支部に新しい道を見出そうという努力がはじめられ，1972年には支部の中に研究グループを置くようになった．メソ気象，乱流，霧，海陸風，長期予報などのテーマについてグループをつくり集約的な成果をあげようということでその成果が期待されている．（京都大学中島暢太郎記）